

坐射での矢番え（やつがえ）動作【 弓道教本第1巻(P94-95) 】より

弓を体の中央に立て、動かぬように正しく垂直に持ったまま弦を返し（弓の下の成り場のあたりをもって）、「胴造り」を保ちつつ両手で物をだきかかえるようにして右手を弓の外側に運び、甲矢・乙矢を見分けながら、甲矢を左手の人差指と中指の間にはさみ、右手を矢に沿って返し、筈をもって一度に送り（繰り込み）矢を番える。二度に矢を送る場合は、矢の中ほどをもって送り、次に筈をもって送りこむ。甲矢を番えたのち、乙矢は羽を的の方向に向け（甲矢と反対にする）、矢の走り羽を下にして薬指と小指、または中指と薬指の間に打ち込み、大体矢の射付節のところを弦にあて、甲矢と乙矢が平行するように持ち、右手はもとの腰の辺に復する。

〔注〕（一）矢番えのとき、体と弓が離れないように、円相に構えること。

（二）弓を体の中央に立てた場合は弦は鼻すじにある。

【詳細】【 弓道教本第4巻(P240-241) 】より

☆弓を立てる

（開き足の）残身の姿勢から弓を立てるとき、手元から弓の先端にまで心が通うような気合いをこめた息合いで、弓の先が体の中央を通過して真っ直ぐに立ってゆけば、動作も生き、弓も生きます。

弓を立て、身は伸びて左膝を生かします。

甲矢を射終わったあとは、跪坐をして左膝を生かして、弓を立てます。

☆矢番え動作

矢番えの動作は、跪坐の体構えがくずれやすいから、体の維持には、余程に心掛けねばなりません。

左肘を張って弓を立て、弦を返しますが、それは、腰の辺にとった右手を、そのまま水平に弦までもってゆくようにすると、弓の下の成り場の辺で弦を返すことになり、動作に心が通って、体もくずれないものです。

次いで矢を持った右手を、左拳を越すところまで送り出し、目は矢に添って羽根を見（甲矢・乙矢の検別）て甲矢を人差指と中指の間にはさみ、顔を戻し、右手は矢に添って筈を持ち（このとき顔も手に添って動きますが、目づかいを主とする）矢を一度に送って矢番えをします。

この動作は、矢の射付節を持ったときですが、矢の板付をかくして持った場合は、矢の中程を持って弦まで送り、次いで筈を持って二度に送りこみ矢番えをします。

これは、射付節を持った場合は、筈までの長さは短かく、板付をかくして持った場合は、その長さが長くなるための動作の違いともいえますが、これは流儀の作法です。

この矢番えの注意点は、弦を返すときと同じように、欠番えで右手が左拳を越すとき腰を浮かせたり、前屈みになりやすく、体構えをくずすので、よく腰を詰めて動作することが大事です。

また左手にもってゆく矢は、心掛けて水平にして運ぶことであり、左手に移った矢も水平に保持されていなければ、矢も動作も生かれません。

弦に筈をかませ、乙矢を持った手は、矢をいったん垂直に立ててから（筈は床につけない）、羽根を的に向けて水平にし、矢の走り羽を下にして薬指と小指、または中指と薬指の間に打ち込み。射付節の辺を弦にあてて。甲矢、乙矢を並行させます。

甲矢を弦に番えるときは、袖摺節を上によければよく、乙矢の走り羽を下にするときは、篋中節を上によればよいので、いちいち顔を動かすことはありません。

これらの動作は、連続して行われるもので、特に動作に心を通わせ、息合い。間合いの調和をとり一つの流れとして。腰の辺に右手を復して残身をとります。

【立射での矢番え動作】【 立射の作法 】より

4、射位で坐射の射手が開き足で脇正面に向きを変えるのに合わせて、的を見て足踏みを行う。

5、坐射の射手の矢番えに合わせて肩の高さ（弓と弦の間に顔が来る）で矢番えを行う。筈を保ち、捧持する気持ちで、円相にて左膝頭に本弭を置く。

6、坐射での立ち上がるタイミングで取矢（乙矢の場合は、弦調べ）を行い、前の射手の弦音で取懸け、行射する。

7、甲矢を射終わり、物見を返したら、的正面に向きを変えながら足踏みを閉じ、本座まで退がり、末弭を床に着けず、矢を持ち替える。